

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

宮崎県西臼杵郡高千穂町岩戸方言について — 四つ仮名を中心に—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中井, 幸比古, NAKAI, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2405

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



宮崎県西臼杵郡高千穂町岩戸方言について
— 四つ仮名を中心に —

中井 幸比古

神戸外大論叢 第68巻 第2号 (2018年) 抜刷

神戸市外国語大学 研究会

宮崎県西臼杵郡高千穂町岩戸方言について

— 四つ仮名を中心に —

中井幸比古

1.はじめに

宮崎県北部方言における四つ仮名弁の存否については見解が分かれているが、どちらかというとなつ仮名弁は存在しないとする研究の方が多い。たとえば音韻を直接扱ったものとして、岩本(1964,1969,1983)は否定的であり、日高(1974)ははっきりと否定する。この地域の比較的大きな方言集である原田(1968)、小嶋(1969)も表記の上で四つ仮名をほぼ区別しない。宮崎国際大学・地域言語研究会編(1998)など最近の言語地図も同様である。一方、明治期の国語調査委員会(1905a,1905b)はやや記述が混乱しているが、三つ仮名弁(ズヅの区別有り、ジヂの区別なし)とし、1989年の「音韻総覧」(『日本方言大辞典』)は四つ仮名弁とする。藤井(1956)は高千穂町岩戸永之内方言について四つ仮名の区別があるという話者の内省をあげる。

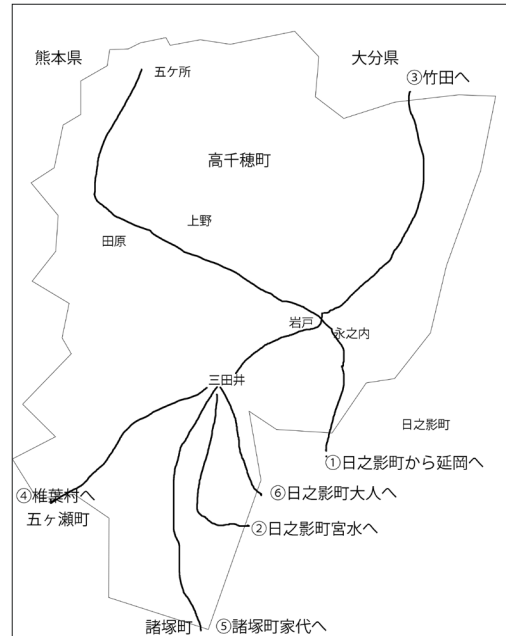
なお本稿で「四つ仮名の区別がない」と言う場合は共通語と同様の「二つ仮名」、即ちジとヂ、ズとヅは同音だが、ジヂとズヅは違う音であることを意味する。

この度、四つ仮名の区別ありとする、明治34年(1901)生の高千穂町岩戸永之内出身の工藤重若^{しげわか}氏(以下SK氏と略す)が記した方言の内省記述資料と、同氏による既存伝説民話集・方言集への注記を見る機会があった(上記藤井1956の話者とは別人)。それを機に高千穂町内の方言を対象とする複数の方言集を見たところ、やはり四つ仮名の区別がなされていた。これらの資料によって、高千穂町内の少なくともかなりの地域で、比較的最近まで四つ仮名の区別があったことは明らかである。

本稿ではこのSK氏の内省記述資料を紹介する。四つ仮名だけでなく合拗音・敬語についても触れるので、それも併せて紹介する。また、四つ仮名にしぼって、上記高千穂町内の伝説・民話集や方言集、それへのSK氏の注記を検討する。さらにSK氏の会話録音資料によって音声実態の一端を探る。

宮崎県北部方言については、今臨地調査を行っても四つ仮名の区別を保っている人はほぼないであろう。日本語方言研究において過去の資料が非常に重要になってきている。

高千穂町の略図を右にあげる。交通路・近隣地域との交流については岩本(1964)にも紹介があるが、本稿では清水(1973)が明治12年西臼杵郡の主な道路としてあげる6本の道路(①~⑥)を略図化したものを示す。岩本(1964)の地図よりも古い状況がわかる。ただ清水(1973)は各道路について経路地点数カ所を示す



のみなので経路の詳細はよくわからず、本稿の略図もごく粗いものにならざるをえない。地名は現行のものを用いた。高千穂町は宮崎県の西北端に位置し、その中心集落は三田井である。三田井を基準点として見ると、東南の宮崎県西臼杵郡日之影町(→宮崎県延岡市)への道路がもっとも数多く3本。大分県竹田市への道路が2本(地図西北の五ヶ所は行き止まりのように見えるが峠越しに大分県側へ抜けられるよう。但し峠はかなり標高が高い)。宮崎県椎葉村・諸塚村へも各1本の道路が見える。これらから、宮崎県延岡市との交流が最も盛んであり(高千穂町域は延岡藩所属)、次いで大分県竹田市との交流があったということになる。明治以降に高千穂町田原から西へ、熊本県側に通じる道路ができてそちらとの交流も盛んになるが、これは新しいものである。

四つ仮名に関して、高千穂町周辺地域について諸家の見解が一致している点をあげる。①熊本県側は四つ仮名の区別がほぼない。②大分県側(大分県南端地域)はほぼ四つ仮名の区別がある。一方、上述のように③宮崎県北部は四つ仮名の区別の有無について見解が分かれているが、宮崎県中南部については四つ仮名の区別があるとされる。高千穂町域は熊本県側との交流が比較的少なく、大分県側とは比較的交流があったわけで、四つ仮名の区別があっても不思議ではないと言えよう。

四つ仮名の区別がある宮崎県中南部の方言の具体的な音声は、岩本(1969,1983)によれば以下の通りである。各音声は「ジ[ji]ヂ[dʒi]ズ[zu]ヅ[dzu]」

で、微妙な違いなので聞き分け難いが、四つ仮名弁の話し手たちによるとその違いがはっきりしている。試みにその仮名文字を尋ねてみると、ほとんど誤りなく言いあてる。やはり音韻として識別されているのであろう。以上の岩本の記述からは、音声的に一貫して相違があるが余所者の研究者には聞き取りが難しいのか、音声的な相違そのものが曖昧化しているのかはわからない。

高千穂町の近隣方言を扱う、上記原田(1968)・小嶋(1969)という地元出身者の内省による、二つの比較的よく知られた方言集における四つ仮名の状況を見ると、両者とも四つ仮名の区別はほぼないようである。原田(1968)は音韻に関する記述を含むが、四つ仮名の区別に関しては述べておらず、「語彙の部」もほぼジズで統一している。但し「づらかず(動サ五) たたく。ぶんなぐる」という例がある。四つ仮名の区別の痕跡か。原田は1909年五ヶ瀬町三ヶ所生まれと記すが、五ヶ瀬町は高千穂町の西南に位置し、熊本県側(四つ仮名の区別なし)との交流が古来盛んであったという(岩本1964)。また、小嶋(1969)には音韻に関する記述はないが、方言語彙集の仮名表記はジズで統一し、四つ仮名の区別はしていないようである。小嶋は1893年宮崎県延岡町生と記す。

宮崎県北部では平地の中心都市延岡あたりから四つ仮名の衰退が始まり、それが徐々に西北の山間部に広がっていったものかもしれない。たまたまこれら二つの比較的大きな方言集が四つ仮名の区別がほぼ失われた地域のものだったために、上記の音声的な類似も加わり、宮崎県北部は全域四つ仮名の区別なしという見解が有力になったのであろう。

2. 高千穂町域の四つ仮名に関する先行研究

高千穂町域の四つ仮名に直接触れたものとしては、岩本(1964)、日高(1974)がよく知られている。岩本(1964)は論文としては高千穂方言を対象としたものであるにもかかわらず、北部日向一般について曖昧な書き方をするに留めている：「北部日向では古老の口に僅かながら区別の痕跡がうかがわれるという程度である」。区別なしという説に傾いているのであろう。

日高(1974)は五ヶ瀬町・高千穂町・日之影町を調査し、「いわゆる四つがなの区別はすでに失われている」と断言する。なお高千穂町内の音韻の方言差について、三田井より西南の地域には中舌母音があるが、それ以外の地域には中舌母音がないとしている。

一方、高千穂町岩戸永之内について、藤井(1956)は話者の一人である、高千穂の郷土史家である明治41年生の藤寺非宝氏の内省報告として、四つ仮名の区別があると記す。

「[ŋ]」の方の理由はいかゞなものであろう。藤寺氏は東京にいた関係で氏の癖とみた方がいゝかも知れない〔この地方一般の方言として鼻濁音 ŋ は使わないのに、藤寺氏がナゴー(長う)のゴを鼻濁音 ŋ で発音したことをさす。但し他にも語中のガ行音が現れるが、これらについては藤井はとくに注記しない〕。「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」も藤寺氏が特に意識して発音しているのかも知れない。」

藤井(1956)もこの話者の四つ仮名の区別ありとする内省報告には否定的なように見える。同書には表記としてジヂズヅが現れるが、必ずしも音声音韻として書き分けているとは限らないようである。唯一、岩戸永ノ内のみ、上記話者の内省などを尊重して、かなりの部分を音声音韻として書き分ける。例えば永ノ内のみ「水」ミヅだが、他地点はミズなど。なお断定の助動詞は全地点チャ、否定の助動詞は全地点ズで表記。但し「六時」は永ノ内も含め全地点ロクヂ(語源ロクジ)。

蛇足ながら、藤井(1956)は、日高(1974)の高千穂町域方言音韻に関する研究文献リストにも挙げられていない文献で、あまり知られていないと思うので紹介しておく。その序文によると「昭和31年7月26日からの神道文化会後援の高千穂学術調査団民俗班(言語)として吉町義雄と研究生藤井茂利の二人が採取したものである。(中略)筆記及編集は藤井茂利が当たった。」として、宮崎県西臼杵郡・東臼杵郡・延岡市の13地点について東条操編『簡約方言手帳語法編』による共通語の文の方言訳をあげ、注釈を付けたものである。そして、この本の内容の一部が吉町(1960)[1981再刊]に含まれる。以下の13地点は藤井(1956)に含まれるもので、○を付けた5地点のみが吉町(1960)にも含まれるものである。地名は両論文のものをそのまま用いる。

西臼杵郡：○高千穂町三田井、岩戸村永ノ内 [=永之内]、○田原村太郎、○三カ所村桑野内土生、三カ所村坂本、○鞍岡村波帰・笠部。延岡市：延岡市岡富本小路 [吉町1960は岡家本小路とする。家中弁]、○延岡市新町 [町方弁]、延岡市南方甲 [在方弁]。東臼杵郡：諸塚村塚原、椎葉村上椎葉、椎葉村不土野尾前、椎葉村尾八重上福良。(なお吉町は西臼杵郡と延岡市の9地点全部の話者氏名・生年・調査日をあげる。さらに高千穂町向山椎屋谷を話者1名で調査地点に加えているが、藤井1956は掲載せず)。

3.高千穂町岩戸永之内の方言—四つ仮名を中心に—

3.1 本稿の中心的な資料

本稿の主要資料は、明治34年(1901)年生、宮崎県西臼杵郡高千穂町岩戸永之内出身のSK氏が作成された、四つ仮名を中心とする方言全般に関する内省記述資料と、『伝承あまのいわと』所収の民話・伝説・方言集への四つ

仮名を中心とする修正・注記である。氏は19才まで同地、19才から京都市在住。SK氏の資料は以下のような経緯で作成されたものである。

高千穂町内で1987～1990年にかけて、以下の三つの郷土誌が作成された。この三つは①→②→③の順に増補されたものである。対象地域は①②が高千穂町岩戸永之内、③が高千穂町全体である。三書ともに民話・伝説・方言集が収録されている。民話・伝説はほとんどが共通語で書かれているが、一部方言で書かれたものもある。

- ①上下永之内集落史編さん会・高千穂農業改良普及所 1987『伝承ながのうち』上下永之内集落史編さん会・高千穂農業改良普及所
- ②伝承あまのいわと編纂委員会 1989『伝承あまのいわと』老人クラブ社会参加モデル推進事業 上・下永ノ内地区実行委員会発行（上・下永ノ内地区老人クラブによって作成）
- ③高千穂町老人クラブ連合古事伝説民話編集委員会編 1990『高千穂の古事伝説・民話』高千穂町老人クラブ連合会

SK氏は1989年～1991年のいずれかの年を中心に②を京都において読み、収録されている民話・伝説・方言集の、四つ仮名をはじめとする伝統的な方言特徴が乱れている部分があるのに気づいた。②（おそらく①～③も）はSK氏より10～20歳程度年下の人が編集したもので、出身地の方言が下の世代ほど崩れてきているのを憂え、1992年に②の編集代表者に、下記、内省記述資料と修正・注記を紙面の余白に書き込んだ②の本を送った。その際、修正・注記を書き込んだ②の本は後に返送してほしいと依頼した。編集代表者の方は依頼どおり、後にSK氏にこれを返送した。その結果、SK氏の一連の資料はすべてSK氏の元に戻り、SK氏の没後はその子孫の方に伝わった。SK氏は①③についてはおそらく読む機会がなかったのではないか。

なお、SK氏は上記作業をしたときに88歳から90歳頃だったが、非常に元気であった。手書きの文字も乱れていない。

3.2 高千穂町岩戸永之内出身のSK氏の方言に関する内省記述資料

SK氏の方言に関する内省記述資料の要点は以下の3点である。

(ア)四つ仮名：岩戸では区別があったが、大正初年頃生以降区別がなくなってきた。区別がなくなった後の音声は「ぢじ」「づず」のそれぞれ中間的な発音である。

(イ)合拗音：クワ→カ、グワ→ガの変化が進んでいる。

(ウ)方言敬語：第三者主語の文について、主語が「普通」の場合の敬語と、主語が「目上」の場合の敬語の2形式がある。

このうち(ア)の四つ仮名の区別について音声面の詳しい観察も行われて

おり、SK 氏自身が音声・音韻の両面で四つ仮名を区別していたことは明らかだと思う。

また(ウ)の方言敬語について「普通」の場合にもある種の敬語がある点が興味深い。岩本(1964)は高千穂町域で「ス・ラス」(SK 氏の言う「目上」への敬語)しか報告せず、「普通」(SK 氏の資料はタ形のみで語形の詳細未詳)の場合の敬語には言及しない。熊本県の一部では「ス・ラス」のほうが「普通」の敬語の場合があり、同じ語形でも敬意に地域差があることが予想されるが詳細未詳。

SK 氏の内省記述資料のうち、音声音韻・敬語に関する主要部分を抜き書きして以下に掲げる。文章には手を入れず、書かれたとおりの形で提示する。[]内は中井の注記である。()内は SK 氏自身が書かれたもの。

①四つ仮名・合拗音について

大正の初期、政令により標準語を制定、日常の会話、文章はこれに従うこととし、方言の主体であった歴史的仮名遣いで[区別があったものを]統合、抹消されたもの多く、方言での会話や文章は不可能になった。[仮名遣いの変更は第二次大戦後とすべきだが、SK 氏には高千穂で四つ仮名が乱れ出したのは大正初年生の世代からという意識があるのだろう]。勿論地方色豊かな方言を無視し全国一斉に標準語に統一したのだから当然のことである。その主なものをあげる。

- a. 五十音の一つ「だぢづでど」の「ぢづ」を「ぢじずぜぞ」の「じず」に統合し、「ぢづ」を文字の上から抹消した。

例 地震 ぢ→じ 明治 ぢ→じ 凶案 づ→ず 頭上 づ→ず

しかし、現実には「じず」は正しく発音されていない。「ぢじ」「づず」どちらともつかない、その中間的発音になっている。(文字の上では「じず」になっていても)。私にはこの両者を区別して発音することも、聴き取ることも出来る。標準語施行以前に小学校に在学した者なら誰でも可能であるが、数少なくなった。

- b. 拗音[合拗音]を清音[直音]に統一

課 クワ→カ 会 クワイ→カイ 画クワク→カク 活クワツ→カツ
完クワン→カン 外グワイ→ガイ 月グワツ→ガツ 丸グワン→ガン

これ等の漢字によって構成される熟語中には、その構成漢字を見なければ、耳より受け入れる声だけでは、その熟語の内容を理解しかねるものもある。

次のような熟語

例 火事クワと家事カ。怪談クワイと階段カイ。環境クワンと艦橋カン

弾丸グワンと断岸ガン

さて、長年月語り続けられて来たなつかしい岩戸言葉、轟畑方言〔轟畑は永之内内部の地名のようである〕での会話を耳にすることが少なくなって来た今日（標準語と混同でいくらか残ってはいるが——五十音 だ行の「ぢづ」は前に述べた通り、拗音〔合拗音〕も殆ど聞かれなくなった）、せめてもの文章の上だけでも正しい「方言」を残しておきたいとの念願がそもそも、「方言を標準語に」の「別冊六」の企画である〔他の企画について、現在「別冊一」から「別冊四」までは不明で、「別冊五」のみを見ることができる。「別冊五」は『伝承あまのいわと』の伝説・民話などに関するコメント集である。「別冊五」・「別冊六」ともに手書き〕。

先づ本書〔『伝承あまのいわと』〕中の「方言文」数編を摘出する。方言は歴史的仮名遣い統合廃止以前のもの。よって方言を表現する場合には言葉も文字も方言時代のものを使用すべきである。そこで私が少年時代（標準語というものがない時代）周囲の人々の談話によって習得した言葉（方言）で浄書し、保存用とし末尾に綴じ込む。

② 〔『伝承あまのいわと』所収の民話「八やんばなし(その二)」への注記〕

この文は方言文として書かれたものだが、本書編集者諸氏は歴史的仮名遣統合の過渡期に小学校在学、否応なしに標準語の波に押し流され、どれが方言でどれが標準語か、区別がつかないまゝ学校を終えられた。それではっきりした方言だけが頭に残った。知らない方言が山程ある。それでは方言は書けない。

岩戸方言の中に生れ、育った私は標準語が施行された時すでに岩戸方言を完全習得。卒業していたので（何も習い覚えたのではなく、日常の会話すべて方言、その他は知らないのだから）方言以外〔の〕言葉はすぐ耳障り〔に〕なる。八十余年たった今日、尚「だ行」「ぎ行」を正しく発音も聞きとることも出来る。

③ 方言敬語に関する説明

〔『伝承あまのいわと』所収の民話「天の岩戸窟の金の階段の話」（10 頁下左から 4 行目～11 頁上右から 12 行目）における主人公の若者を動作主とする文の述部の敬語についてのコメントである。下例では、敬意はイとシで変わる。なおこの話は、普通の人間には、天の岩戸窟へ通じる金の階段は見えないが、「足に月の輪というものを踏んでいた」或る若者にだけ見えたというものである。言うまでもなく高千穂町岩戸地区には天岩戸の伝説がある〕

普通 行かいた。行きよらいた。帰らいた 年令的に若い者に対して

丁寧 行かした。行きよらした。帰らした 目上の者に対して。若くても偉い人
(自他共に認め地位・身分のある人)
右二種類だけ。むしろ標準語の方が複雑。帰った。帰っていった。お帰りに
なった。お帰りあそばされた。本文の若者は金の階段が見えるのだから、何かかわった
エライ人にちがいない。それで丁寧語(し)にしたら、何となくすっきりするよう
な気がする。

以上①～③の3点がSK氏による方言に関する内省記述資料の原文通りの、音声音韻・敬語に関する主要部分である。

3.3 『伝承あまのいわと』の四つ仮名とそれに対するSK氏の修正・注記

『伝承あまのいわと』の四つ仮名とそれに対するSK氏の修正・注記について見ていく。あわせて『伝承あまのいわと』(1989年)の前段階の『伝承ながのうち』(1987年)も見ておく。SK氏の修正・注記は四つ仮名が中心であるが、それだけでなく合拗音をはじめとする音声の各面、文法、歴史、民俗など多方面にわたるが、今回は四つ仮名にしぼって検討する。

表1と表2に結果をまとめた。表1は各資料の四つ仮名が一致したもの、表2は一致しないものである。

表1 四つ仮名の対照表

SK氏	『伝承あまのいわと』	『伝承ながのうち』	語源	数	纏め	纏め数
じ	じ	じ	#	14	じ	17
じ	じ	—	#	3		
じよ	じよ	じよ	#	4	じよ	5
じよ	じよ	—	#	1		
ず	ず	ず	#	10	ず	13
ず	ず	—	#	3		
ず、づ	ず、づ	ず、づ	#	1	ず、づ	1
ずい	ずい	ずい	#	1	ずい	1
ぢ	—	—	#	1	ぢ	1
づ	づ	—	#	5	づ	7
づ	づ	づ	#	2		
じ	じ	じ	し	1	じ	40
じ	じ	じ	じ	26		
じ	じ	—	じ	9		
じ	じ	じ	じ#	2		
じ	じ	—	じ#	2		
じゃ	じゃ	—	じゃ	2	じゃ	3
じゃ	じゃ	じゃ	じゃ	1		
じゅ	じゅ	じゅ	じゅ#	1	じゅ	1
じよ	じよ	じよ	じよ	2	じよ	3
じよ	じよ	—	じよ	1		
ず	ず	ず	ず	21	ず	39
ず	ず	—	ず	13		
ず	ず	—	ず#	5		
ぢ	ぢ	ぢ	ぢ	3	ぢ	7
ぢ	—	—	ぢ	1		
ぢ	ぢ	—	ぢ	1		
ぢ	ぢ	—	ぢ#	2		
ぢゃ	ぢゃ	—	ぢゃ	1	ぢゃ	2
ぢゃ	ぢゃ	ぢゃ	ぢゃ	1		
ぢよ	ぢよ	ぢよ	ぢよ	1	ぢよ	2
ぢよ	ぢよ	—	ぢよ#	1		
づ	づ	づ	づ	9	づ	25
づ	づ	—	づ	8		
づ	づ	—	づ#	5		
づ	づ	づ	づ#	2		
づ	—	—	づ#	1		
合計(#45、それ以外122)				167		167

語数はすべて延べ語数。

表1は、左から、SK氏の注記、『伝承あまのいわと』の表記、『伝承ながのうち』の表記、語源・辞書類から考えられる四つ仮名の別、該当する語数、いくつかを纏めた語形、纏めたものに該当する語形の順に示す。「#」は不確定であることを、「づ#」のように示したのは、おそらく「づ」だがやや不確かなことを示す。

語源・辞書類から考えられる四つ仮名については、『日本国語大辞典』(第2版)を主とし、『高知県方言辞典』を従として用いた。高千穂の近隣方言で、四つ仮名の網羅的な記録を含む方言辞典が見当たらないので、地域は離れるが、四つ仮名に定評ある辞典として高知県の物を使用した。

なお一つのセルに「ず、づ」などとあるのは、ある一つの語について複数の表記が見られるもの。

表2は各資料の四つ仮名が、何かしら一致しないものである。これにつ

表2 SK氏の訂正の妥当性について

SK氏	『伝承あまのいわと』	『伝承ながのうち』	語源	数	訂正の妥当性		
					訂正内容	妥当性	数
ぢ	じ	ー	じ	1	ぢ←じ	×	1
じず	じず	じ	じず	1	じ・ず	○	1
じ	じ	じ	ぢ	6	じマ	×	10
じ	じ	ー	ぢ	1			
じ#	じ	ー	ぢ	1			
じ	じ	ー	ぢ#	2			
ぢ	じ	ー	ぢ	2	ぢ←じ	○	7
ぢ	じ	じ	ぢ	2			
ぢ	じ	ぢ	ぢ	1			
ぢじ	じ	じ	ぢ	1			
ぢ	じ	ー	ぢ#	1	ぢマ	×	2
じゃ	じゃ	ー	ぢゃ	1			
じゃ	じゃ	じゃ	ぢゃ	1	ぢゃ←じゃ	○	3
ぢゃ	じゃ	ー	ぢゃ	1			
ぢゃ	じゃ	じゃ	ぢゃ	1			
ぢゃ	じゃ	じゃ	ぢゃ	1			
ぢゆ	じゆ	ー	ぢゆ	1	ぢゆ←じゆ	○	1
じよ	じよ	ー	ぢよ	1	じよマ	×	2
じよ	じよ	ー	ぢよ#	1			
ぢよ	じよ	ー	ぢよ	2	ぢよ←じよ	○	3
ぢよ	じよ	じよ	ぢよ	1			
ず	ず	ず	づ	8	ずマ	×	16
ず	ず	ー	づ	4			
ず	ず	ー	づ#	2			
ず	ず	ず	づ#	2			
づ	ず	ず	づ	4	づ←ず、ず←ず	○	17
づ	ず	づ	づ	3			
づ	ず	ー	づ	3			
づ	ず	ず	づ#	3			
づ	ずづ	ー	づ#	2			
づ	ず	ー	づ#	1			
ずづ	ず	ず	づ	1	ずづマ	×	1
ずづ	ずづ	づ	#	1			
づ	ず	ず	#	1	づ←ず	?	1
合計				65			65

いてはSK氏の訂正の有無とその妥当性について記した。妥当性は語源・辞書類から考えられる四つ仮名に一致するかどうかで判断せざるを得ない。

四つ仮名の区別はあっても偶々ある地域で例外的な振舞を示す単語がありうるなどの問題があるが、今後の課題とする。なお、語源「づ」、SK 氏の訂正「ずづ←ず」という 1 例は○に準ずると考え、そこに含めた。

表 1 と表 2 から以下のようなことがわかる。

①SK 氏による修正はほとんどが妥当である。但し、修正はおそらく徹底しておらず、もし SK 氏が個々の語の四つ仮名をすべて語源・伝統方言通りに発音していたのなら、修正は約半数程度にとどまるようである。四つ仮名該当項目だけで 232 項目もあり、この民話伝説・方言集全体をくまなく手作業でチェックすることは作業時の 90 歳前後という年齢を考えると至難で、不徹底があっても当然と言えよう。むしろこれだけ作業できたことに驚くべきである。

現代仮名遣いはほとんどジズだから、修正はジ→ヂ、ズ→ヅが大部分ということになる。過剰矯正の例はほとんど見られないから、SK 氏の四つ仮名に関する意識は正確である。なお、SK 氏は音声音韻として区別をしていますが、個々の語については下の世代ほどではないが乱れ始めていた—具体的には伝統的なヂ・ヅを含む単語ジ・ズに発音する語がいくらかある—可能性もないではない。しかし、多くの語はチェック洩れによるものではないだろうか。

なお『伝承あまのいわと』の四つ仮名は乱れているとは言っても、それほどにはひどくない。著しい乱れは特定の民話・伝説に集中して現れる傾向がある。その文章を書いた人がたまたま下の世代の人だったのかもしれない。

② i 段と u 段の語数を見ると、「じぢ」と「ずづ」では後者のほうが多い。しかし「じゃぢゃ、じゅぢゅ、じょぢょ」を「じぢ」に合わせると、i 段と u 段の語数は伯仲する。語源から見た各仮名の語数は、以下の通りである：じ 40、ぢ 24、じゃ・じゅ・じょ 7、ぢゃぢゅぢょ 15、ず 39、づ 58。ジヂはジの方が多く、ズヅはヅの方が多い。これはヂがヅより破擦音化・摩擦音化が進む方言が多い理由の一つであろう。杉村(2001)なども参照。

③語頭と語中の変化率の差は、下表（語源明確なものに限る）からは語頭で変化が進んでいるように見える。下表において、たとえば「語頭一致」は「語頭に四つ仮名があり、かつそれが語源に一致している場合」を示す。

表 3 語頭と語中の合流の遅速

語頭一致	語源明確	19	語中一致	語源明確	88
語頭不一致	語源明確	19	語中不一致	語源明確	52

ただ、助詞・助動詞の場合はその前の自立語と合わせて 1 単位としたの

で、頻繁に現れて話題に上りやすい断定助動詞のチャなどは語中として扱

表 4 SK 氏の修正の具体例(語源が一応分かり、各資料表記が 1 通りの物)

SK 氏の注記	『伝承あまのいわと』	SK 氏	『伝承あまのいわと』	『伝承あまのいわと』	語源	語義・中井注
つうぢちよる	つじちよる	ぢ	じ	—	じ	
デージ	デェジ	じ	じ	—	じ#	大変・大事な事
いしいぢ	いしーじ	ぢ	じ	—	ぢ	
わけえもんだけちやっただげな	若もんだけじゃげな。	ぢ	じ	—	ぢ	
カヂ	カジ	ぢ	じ	じ	ぢ	こうぞ【土佐子】
ワラヂザケ	ワラジザケ	ぢ	じ	じ	ぢ	出発に際しての祝酒
オンヂ・オンヂボウ	オンジ	ぢ	じ	ぢ	ぢ	長男でないもの←主人の弟
ヒヂンド	ヒジンド	ぢ	じ	—	ぢ#	ひび【?】←ひじ
わかったんぢやろかのお	わかったんじゃろかのお	ぢや	じゃ	—	ぢや	
チャ[ワン]	ジャ[ワン]	ぢや	じゃ	じゃ	ぢや	そうだ(わ)
カネヂュウ	カネジュウ	ぢゆ	じゆ	—	ぢゆ	家内中・家族中
ふんぢよったげな	踏んじよったげな。	ぢよ	じよ	—	ぢよ	
ふんぢよった	踏んじよった	ぢよ	じよ	—	ぢよ	
メメヂョ	メメジョ	ぢよ	じよ	じよ	ぢよ	ねこやなぎの花
コエツカ	コエズカ	づ	ず	づ	づ	堆肥を積んだ塚
ゴウセツリ	ゴウセスリ	づ	ず	—	づ	家中皆んな連れ
チョウツバ	チョウズバ	づ	ず	づ	づ	便所【手水】
ハネツクリ	ハネズクリ	づ	ず	づ	づ	支度
フウツツミ	フウズツミ	づ	ず	づ	づ	ほほかぶり
ヘコハツシ	ヘコハズシ	づ	ず	ず	づ	仕事が一段落する事
コツム	コズム	づ	ず	ず	づ	積み重ねる
サツ(デル)	サズ(デル)	づ	ず	ず	づ	かき集める
ナツル	ナズル	づ	ず	—	づ	なでる
ヒツウヒツウ	ヒズヒズ	づ	ず	—	づ	ひどく
ツウソ	ズウソ	づ	ず	ず	づ#	極道者【ツなら「鬨」か「頭」。『日国』ズーシレモノ【一痴れ者】を語源とする】
ツウタン	ズウタン	づ	ず	ず	づ#	冗談【『日国』虎明本狂言の「でうだん」をあげる。仮名書きの漢字不明とのこと】
ツウサレ・ツウタレ)	ズウサレ(タレ)	づ	ず	ず	づ#	役立たず
フツダ	フズダ	づ	ず	—	づ#	くぬぎの実・どんぐり

った。これも語中のほうが変化が遅れているように見える理由の一つか。
④最初に出た『伝承ながのうち』は次に出た『伝承あまのいわと』より、ごく僅かだが、四つ仮名に乱れが少ない。

表4にSK氏の修正の具体例を掲げる。

中には連濁などで、音声音韻として区別を失っていても四つ仮名の区別ができてしまう例もあるが、そうでない例もかなりある。このことも、SK氏が音声・音韻としてきちんと四つ仮名の区別を保っていたことを示すものである。

3.4 高千穂町内の他の方言集の四つ仮名表記

高千穂町内の他の方言集として、関口(1940)と甲斐(1973)を見ておく。いずれも四つ仮名の区別がほぼなされている。

表5 関口(1940)の四つ仮名関係語彙

語形	意味	SK氏注釈←『伝承あまのいわと』	SK氏らと一致するか
アジヨ	彼の人	アンジョで掲載	○
イナカツ	下品者	ナシ	—
オズイ	恐ろしい	オズガルで掲載	○
オンチボ	次男以下の男	オンチボウ←オンジボウ・オンチボウ	○←○ ×
カジムル	片付ける(ナラス)	カジムル	○
クウズル	病気が重くなる	クウズル	○
コズイババ	産婆	ナシ	—
コンジヨ	この人	ナシ(アンジョはあり、ジョ)	—
ズースキ	雑炊	ズウシイで掲載	○
ズンド	遂に[別項ツンド]	ズンド、ツンド	△
セツボジル	いぢめる	セツボジルで掲載	○
ヅウサリ	なまけもの	ナシ	—
ヅウサル	転ぶ	ヅウサラケルなど掲載	○
ヅウソ	なまけもの	ナシ	—
ヅボラクル	ころぶ倒れる	ヅウボラクルなどであり	○
ヅラカス	打つ	ヅラカス	○
テンジク	天空	ナシ	—
ハンツ	水がめ	ハンツ	○
ヒザボズ	膝頭	ナシ	—
ヒジンド	肘	ヒチンド←ヒジンド	×←○
ヒツクシ	終日	ヒツクシ←ヒズクシ、ヒツクシ	○←○ ×
フユジ	なまけ者	フユジ【寒がり】	○
ボチヤワイ	大変ですよ	ナシ	○
ワジヨ	君	ナシ	—

関口泰(1940)は「高千穂通信員である田尻晴夫氏が知らせてくれた高千穂言葉のうち、ナマリと思はれるものなどを除いて書いて置かう。藤寺非宝

氏は三萬語位集めてあるといふから、早く発表されるといふと思ふ」とある。関口の資料の大元は藤寺氏作成資料だろうか。この藤寺氏は藤井(1956)の話者と同一らしい。関口は四つ仮名に関する記述をしないが、語彙集から四つ仮名関係の語彙を拾うと、ジヂズヅともに区別がなされている。表5参照。この本の高千穂方言の音韻の記述について、新村(1940)が言及しているが、「波行のFが部分的ながら現在なほ行はれてあるさうである」として、関口(1940)から「ハヒフヘホをファフィフェの発音で残してあるのも面白い[関口1940はフアファイフェで、フオを欠く—中井注—]」を引用するのみで、四つ仮名については言及がない。

表6 甲斐(1973)の四つ仮名関係語彙

語形	意味	SK氏注釈←『伝承あまのいわと』	SK氏らと一致するか
いじくる	あつかう	ナシ	—
いずめえ	居ずまい	イズメ	○
おじい	恐ろしい	オジイ	○
おんじ	主人の弟	オンヂボウ←オンジボウ・オンヂボウ	○←○×
かじむる	蔵する	カジムル	○
くうずる	こうずる	クウズル	○
くわんじん	物貰い	クワンジンメシ	○
こんじょ	この人	ナシ(アンジョはあり、ジョ)	○×
じぎ	遠慮	ジギ	○
じょうせき	思った通り	ジョウセキ	○[『日本国語大辞典』はヂョ?]
ずんど	遂に	遂に[別項目ツンドあり]	ズンド、ヅンド
せつぼじる	いじめる	セツポジルで掲載	○
たじねえ	乏しい、少ない	ナシ	—
ちょこじる	くすぐる	チヨコジル	○
づうさり(れ)	怠けもの	ナシ	—
づうさる	ころぶ	ヅウサラケルなど掲載	○
ひづくし	終日	ヒヅクシ←ヒズクシ、ヒヅクシ	○←○×
ふゆじ	仕事をいやがる者働かないもの	フユジ【寒がり】	○

次に甲斐(1973)はジだけでヂの例がないが、ズヅの例はともにあって区別もある。おそらく(三つ仮名弁ではなく)四つ仮名弁だろう。表6を参照。甲斐(1973)はあがっている参考文献などが異なるので、依拠した資料は他と違うかと思われる。その他の地元での既刊資料は『伝承あまのいわと』系3著も含めて、すべて岩戸永之内方言が基盤になっているようなので、大元が

繋がっている可能性もある。

この他に以下の3資料があるが、本稿では扱わない。

『伝承あまのいわと』を増補した、高千穂町老人クラブ連合古事伝説民話編集委員会編(1990)『高千穂の古事伝説・民話』(高千穂町老人クラブ連合会)は、四つ仮名については多少の異同はあるが、大きな変更はないので省略する。岩戸永之内だけでなく、高千穂町全体を対象とした冊子に変更されたにもかかわらず、四つ仮名についてはとくに大きく変えられなかったのは、高千穂町全域で区別が或る程度はあったのかもしれない。

日高(1974)があげる小手川善次郎「高千穂の方言に就いて」(S10年代)と、甲斐(1973)p.858があげる小手川善次郎「西臼杵方言考」は未見である。小手川氏は高千穂町三田井出身の民俗・郷土史家で、孔版による数多くの著作がある(「みやざきの101人」<https://www.pref.miyazaki.lg.jp/contents/org/chiiki/seikatu/miyazaki101/hito/061/061.html> 2017年8月27日閲覧)。没後にその孔版の著作の多くが活字化されて2冊の本にまとめられたが、方言関係のものは散逸した可能性がある。

いずれにしても、現在見ることができる高千穂町の方言集は、語源などから四つ仮名の推定ができない単語も四つ仮名の区別をしているので、乱れが目立つ文献もあるものの、基本的には、音声・音韻として四つ仮名が区別されていることに間違いはない。

3.5 高千穂町岩戸永之内出身のSK氏の会話録音資料に見る四つ仮名

前節までで、高千穂町の少なくとも岩戸方言では、最近まで四つ仮名の区別があったことが明らかになったと思う。個人の例としてはSK氏が音声・音韻として四つ仮名の区別ができることも明白である。しかし、書かれたものからは、具体的にどのような音声で「じぢずづ」を発音していたのかは、先に挙げた、SK氏の自省報告以上のことはわからない。

幸いなことに、SK氏については、前節までで紹介してきた岩戸永之内方言資料作成とほぼ同時期の1989年に、SK氏が京都で、主に京都生の親族・親しい知人と会話し、またスピーチをしているビデオ(家庭用ビデオ機で録画されたもの)が御子孫の許に残されており、その音声を聞くことができた。本稿ではスピーチの中から四つ仮名関係の61例を取り出して検討する。下記音声面のいくつかの特徴を除き、当然ながら、岩戸方言的ではなく共通語的な話し方である。但し断定の助動詞はチャが多く現れる。

全般的な音声特徴について記すと次の通り。アクセント・イントネーションは岩戸永之内方言の名残が強い。ガ行に鼻濁音は原則として現れない。但し、カンガエル(考)・ヂューシンガ(重心が)のようにンの後では時に鼻

濁音が現れることがある（鼻濁音でない場合もある）。藤井(1956)のナゴー（長う）の鼻濁音の発話例は、東京方言の影響も考えられるが、前にナ（鼻音+母音）がある例なので、ンの後の環境に準じて考えられる可能性もある。二重母音 ei は普通 ei のままで、長音化しない。例：セイシン精神[seiciN]。母音の無声化はもちろんあるが、極端に多いというほどではない。セゼの口蓋化はほぼない（岩戸方言本来の特徴かもしれない。岩本 1964 参照）。ツの子音は原則的に破擦音[tʃ]であるが、時に摩擦部分が弱いことはある。

四つ仮名関係の発話例 61 を、語源的にみてジヂズヅのいずれかであるかを見ると、以下のとおりである。残念ながら全部の環境で発話例が揃っていないわけではないが、それでも概要は分かる。ジュの例が非常に多いのは、「十（ジュー）」「寿（ジュ）」が繰り返し現れるからである。付属語は自立語と併せて 1 語とした。なお語頭の例で前に休止があるのはごく少数。

語中ジ 13、語中ジャ 1、語中ジュ 19、語中ヂャ 3、語中ヅ 4；語頭ジ 7（うち前にポーズがあるもの 3）、語頭ジュ 10（うち前にポーズがあるもの 1）、語頭ジョ 1（うち前にポーズがあるもの 1）、頭ヂュ 2（うち前にポーズがあるもの 0）、頭ヂョ 1（うち前にポーズがあるもの 0）。

ジジャジュジョズはほぼ摩擦音である。撥音ンの後でも破擦音化することはない。ヂャヂュヂョヅは原則的に破擦音（時に摩擦が弱い）である。

ただ、私には特に語頭に位置するとき摩擦音と破擦音とを区別できない場合がしばしばある。また、特に弱く発音された部分（断定助動詞ヂャの発話の一部など）などでは破擦音か破裂音かがわからない場合がある。

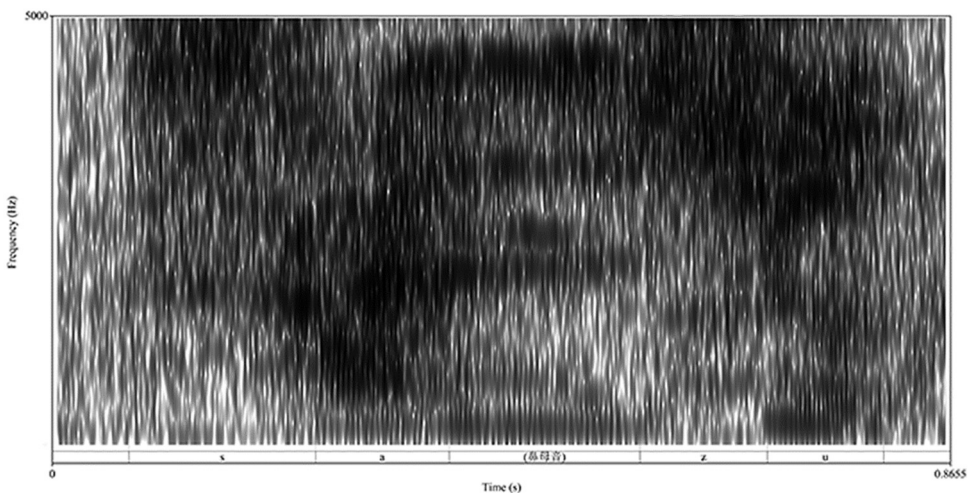


図1 サンジュ（傘寿）の発話のスペクトログラム

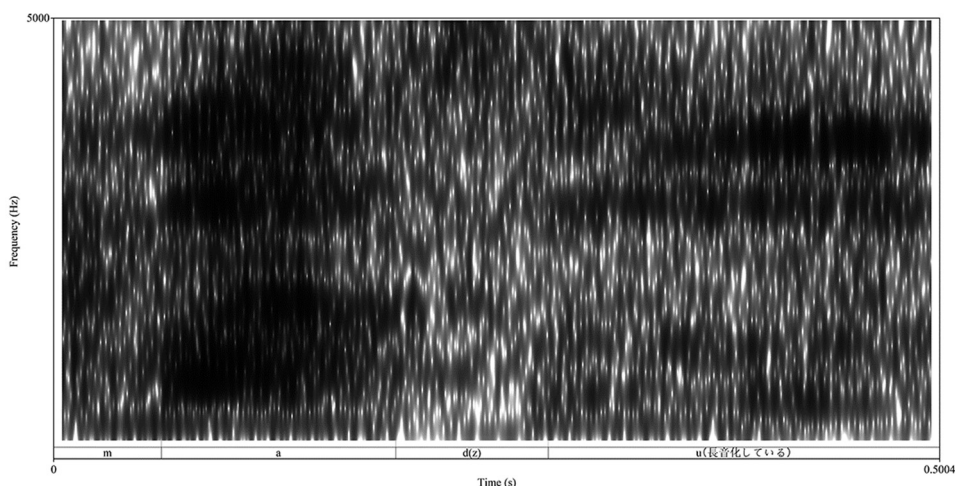


図2 マヅ（先ず）の発話のスペクトログラム

家庭用ビデオ機での録画・録音なので、音響分析には向かないのだが、二つの発話例をサウンドスペクトログラム (Praat version 6.0.20 による) とともに見る。

図1 サンジュ (傘寿) の発話のスペクトログラムではンが鼻母音的でジュの子音には閉鎖部分がないことがある程度読み取れるかと思う。図2 マヅ (先ず) は少々わかりにくいだが d(z) の初頭部分に閉鎖 (無声) がある程度読み取れるか考える。但し発話のない部分にもノイズが多い。

ともあれ、京都で長年暮らしていて、京都生まれの人たちと話す場合も、SK 氏は四つ仮名の区別はほぼ保っていたと見てよいようである。ただ、現代仮名遣いがほぼジズに統一されたので、摩擦音で発音しようとしている可能性もないではない。

4. おわりに

本稿では以下のようなことを明らかにした。

①宮崎県西臼杵郡高千穂町域に分布する方言の四つ仮名について、従来の研究は四つ仮名の区別なしとするものが多かったが、明治34年生、高千穂町岩戸永之内出身のSK氏が作成した資料と、地元刊行の方言集の仮名表記から、明治末年頃までに生まれた人は音声・音韻としての区別があったことが明らかになった。それが下の世代では徐々に区別が曖昧化していく。明治以降の全国共通語化の一つとして位置づけられるだろうが、第二次大戦後の仮名遣いの変更より前から区別が乱れてきている。合拗音・敬語についても触れた。

②四つ仮名の具体的な音声については、SK氏作成資料にいくらか内省報

告がある。また SK 氏のスピーチを録画・録音したビデオから、原則として、ジズは摩擦音、ヂズは破擦音であって、両者はほぼ区別されているようである。但し現代仮名遣いの関係で摩擦音を優先しようとしている可能性はある。今後の伝統方言音声の研究において、方言研究以外の目的で各家庭において録画されたビデオなどが一定の役割を果たすことが期待される。

参考文献

- 岩本実 1964 「日向の高千穂方言」『宮崎大学学芸学部紀要』17 pp.15-31
 岩本実 1969 (1991 改訂版) 「宮崎 (九州方言の各県別解説)」九州方言学会編『九州方言の基礎的研究改訂版』風間書房 改訂版 pp.245-253
 岩本実 1983 「宮崎県の方言」『講座方言学』国書刊行会 pp.267-293
 甲斐暎常 1973 「高千穂町の方言」『高千穂町史』宮崎県高千穂町 pp.858-862
 九州方言学会 1969 (1991 改訂版) 『九州方言の基礎的研究』風間書房
 国語調査委員会 1905a 『音韻調査報告書』
 国語調査委員会 1905b 『音韻分布図』
 小嶋政一郎 1969 『延岡の言葉』光輪舎
 新村出 1940 「高千穂の古音」『方言研究—発会記念冊—』日本方言学会 pp.1-2
 清水秋義 1973 「交通」『高千穂町史』宮崎県高千穂町 p.618
 杉村孝夫 2001 「九州方言の四つ仮名」『音声研究』5-3 pp.10-18
 関口泰 1940 「高千穂郷方言集」『高千穂峰』(同年3月刊有斐閣)、『高千穂』(同年6月刊相模書房) 後者の pp.349-367
 土居重俊・浜田数義 1985 『高知県方言辞典』高知市文化振興事業団
 原田欣造 1968[1928の改訂版] 『西臼杵方言考』高橋書店
 日高貢一郎 1974 「宮崎県西臼杵方言における中舌母音の \ddot{e}, \ddot{i} について」『日本方言研究会第19回発表原稿集』(『日本列島方言叢書 九州方言考 ④』左 pp.201-214。ゆまに書房 1999 再録)
 藤井茂利 1956 序文 『北日向方言集』著者刊 (孔版)
 宮崎国際大学・地域言語研究会編 1998 『宮崎県言語地図集』
 吉町義雄 1960[1981 再刊] 「高千穂・阿蘇の言語学的調査」『高千穂・阿蘇』神道文化会 再刊 pp.349-367
 「音韻総覧」1989 『日本方言大辞典 下巻』小学館 左 pp. i -vi、pp.1-77

〔謝辞〕 SK 氏の御子孫は、SK 氏による岩戸永之内方言に関する資料と、SK 氏の会話の録音を研究に使用させて下さり、さらにこのような形での公開を許可して下さいました。藤井茂利氏は藤井(1956)の存在を教えて下さり、またその冊子を下さった。小手川善次郎氏の御子孫は善次郎氏の方言関係の著作に関して丁寧なお返事を下さった。高千穂町教育委員会には地元で刊行された資料のコピーについてお世話になった。皆様の御厚意に厚く御礼を申し上げます。

Keywords: 四つ仮名 宮崎県方言 高千穂町方言 岩戸方言

On Iwato Dialect, Takachiho-cho, Nishiusuki-gun,
Miyazaki Prefecture
—Centering on the “Yotsugana” Phonemic System—

NAKAI Yukihiko

Offprint from *The Kobe City University Journal*

Vol.68 No.2 (2018)